

はくさんろく

白山麓十八か村の幕領化と西谷の村々

西谷五か村（新保・須納谷・丸山・小

原・杖の各村）など白山麓十八

か村が幕領（天領）に組み込まれたのは寛文八年（二六六八）のことであった。信仰の山、白山頂上の堂舎修築の権利をめぐる争いは、戦国時代より村落間で争論が表面化していたが、明暦元年（二六五五）に再燃した。

この明暦の争論は、直接的には加賀藩領尾添村と福井藩領り領牛首・風嵐村との間で起こったものであった。しかし、事態は単に村同士の争いとどまらず、元まつりけん 柚取権をめぐる加賀藩と福井藩の領



「明暦の争議」（金沢市立玉川図書館 加越能文庫） 白山麓の幕領化をめぐる、幕府勘定頭岡田義政と加賀藩側とのやりとりを収載する貴重な文献である。



昭和中期の須納谷村（『川の流れは絶えずして 石川県小松市新丸地区』より）



「白山下領境絵図」(石川県立歴史博物館所蔵) 白山麓18か村の幕領化がはかられる際に作成されたものとみられる。

境争いでもあったから、加賀藩、福井藩
双方ともただちに幕府に対し主張を開

始した。状況はどうも福井藩有利に動
いていたようである。ただ村方では、その

後も小競り合

いが続いてお

り、加賀では

白山長吏が天

皇の権威を盾

に巻き返しを

図ろうとする

動きも見られ

た。早急な解

決が求められ

たのである。

この間の西

谷五か村の動

きは記録にみ

えないが、同

じ福井藩預り

領ということ

もあり、牛首・

風嵐等の村々

と歩調を合わ

せていたとみ

てよからう。

このころ加賀藩では、五代藩主綱紀つなのり
が、幕府の実力者で岳父の保科正之ほしなまさゆきの
後見のもとで藩政を本格化させていた。

綱紀は、寛文六年（一六六六）ころ正

之や加賀藩に近い立場であった幕府勘

定頭岡田義政（豊前守）とともに争論

解決に乗り出した。すなわち加賀藩領

二か村と牛首・風嵐や西谷五か村など

計一八か村を幕領とすることで調整が

はかられたのである。

こうして、寛文八年、十八か村は正

式に幕領となり、西谷五か村も美濃笠

松代官杉田九郎兵衛の支配下となった。

しかし、この幕領化は支配者の政治

的な論理でなされたためか、争論の根

本的な解決とはなっておらず、能登へ

の移住を余儀なくされるなど出作りに

より生計をたてていたこの地域の人々

の暮らしにも大きな影響を与えること

になった。その後も白山麓では村落間

や、平泉寺を巻き込んだ対立は続き、

落ち着きをみせるのは幕府の裁決をみ

た十八世紀半ばのことであった。

（石野友康）